慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	源氏物語における「いろごのみ」の概念
Sub Title	"Irogonomi" in the tale of Genji
Author	西村, 亨(Nishimura, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1958
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.8, (1958. 10) ,p.16- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00080001-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

源氏物語における「いろごのみ」の概念

西村亨

一

源氏物語の最も重要な主題としていろごのみを擧げられたのは故折口信夫先生である。源氏物語の主題の探求において、これは宣長のもののあはれの論以來の發見であり、發展であつたと言ふことができよう。先生の説かれたいろごのみは古代日本の神や君主の持ち傳へた道德であり、理想的な生活であつた。それは、いろごのみといふ語から今日われ〳〵が受ける好色といつた意味とは、全く別のものであつた。

いろごのみといふ語を語原的に説明することは大變困難である。折口先生は、いろはいろね・いろも・いろはなど女性に關して用ゐられることの多い語で、それが女性或は女性に關する道といふ意味を持つやうになつたもの、このむは選擇することだと言はれてゐる。しかし、いろといふ語の古い用語例がもつと多く見出されない限り、今日では、いろごのみの概念をこれ以上ことばの上から説明することは不可能であらう。われ〳〵に殘されてゐるいろごのみといふ語の用語例は、早くからその本義を失つてしまつてゐる。古今集の假名の序は、當代の和歌が「いろごのみの家に」埋れてしまつたことを歎いてゐる。これなどはいろごのみといふ語の第一級の資料であるが、既に好色の意義に用ゐられてゐる例である。古今集の時代には、漢語の飜譯語として、在來の和語や和語を組み合はせた

造語が行はれた跡を見ることができる。例へば鬼神といふ漢語を「おにがみ」と譯したなどそれであるが、この語の場合、本來同列に扱はれてはならないおにとかみとが竝列せられた爲に、兩者の概念を混亂させる一因となつた。この種の、漢語と飜譯語との間にある概念のずれから、和語の意味が變化したり、歪められたりしたことが他にも幾つもあつたものと思はれる。いろごのみの場合も、それが好色の譯語となつた爲に、好色といふ漢語の持つ意義內容に引き寄せられたことが考へられる。平安朝の物語類に見えるいろごのみが多くは好色もしくはそれに近い意味に用ゐられてゐるのはその爲である。

もちろん、これは單にことばの上ばかりに考へられることではない。日本人の生活自體が外來の思想に壓倒せられて、生活倫理が轉向しようとしてゐたのである。儒教・佛教はともに好色・邪淫を戒めてゐるが、これらの體系的な思想に觸れた時、それまで何の反省もなく祖先以來持ち傳へてゐたいろごのみの生活に、必然的な動搖が起らずにはゐなかつた。しかも、いろごのみは日本人の生活自體が生み出した理想であり、理論を以て說明し盡すことのできるものではなかつた。それだけに一度反省が起つてみると、自分達の生活の矛盾や不合理が次々に自覺せられて來た。なぜ自分達は先進國の優れた教へが說くところに反するやうな生活をしてゐるのであらうか。さういふ疑問が古來の生活の權威を失はせ、日本人の倫理觀を變化せしめて行つた。しかもなほ、觀念の上では儒佛の教へを正しいものと認めながらも、生活感情までが直ちにそれに從ふわけにはゆかなかつた。だから、ともすれば復活しようとする傳統的な生活と、それを恥づべきものとする近代の倫理とが長く日本人の生活の上で爭ひ續けることとなつた。いろごのみといふ語ひとつにも、さういふ時代々々の陰影が籠められてゐる。

例へば、伊勢物語にはいろごのみといふ語がかなり數多く用ゐられてゐるが、それらの全體を通じて見れば、決して良い意味に使つてゐるとは思はれない。「これはいろこのむといふすきもの」（六十一段）などといふ例もあつて、殆ど好色といふ意味と同じなのである。だが、中に「天の下のいろごのみ」といふ語が出てくる（三十九段）。內親王の御葬りの夜、宮の隣に住む男が女車に相乘りで出かけたのを、源至といふ人が女車と見て言ひ寄つてくる話がある。その源至のことを「天の下のいろごのみ」と言つてゐるのである。この語は、それ自體がいろごのみに對する讚美の氣持を見せてゐる。それにも拘らず、女車に言ひ寄つて車の中に螢を取つて入れたと

いふやうな行爲に對して、もひとつはつきりした批評を示してゐない。

竹取物語にも同じやうな例がある。かぐや姫に言ひ寄つた人々が次第に諦めて最後に五人の貴公子が殘るが、これを「いろごのみと言はるゝ限り五人」と言つてゐる。いろごのみといふ評判を持つてゐる人ばかりといふのだから、「天の下のいろごのみ」といふのに近い言ひ方である。竹取物語はよばひといふ語についても、夜這ひ歩くからといふやうな語原說明をしてゐる程だから、いろごのみの意義もかなり低く扱はれてゐるかも知れない。それでも、こゝに出て來る五人の二人は皇子、他は右大臣・大納言・中納言であつて、身分・家柄から言つて、決して言ひおとされるやうな人々ではないのである。

折口先生がいろごのみを以て古代的な戀愛道德の理想とされたのは、右のやうな例からいろごのみといふ語の本義を感取せられたからであらう。いろごのみの用語例はこれより古いところには見當らないし、源氏物語における用語例からも、直ちにいろごのみの古代的な意義を感じさせるものは無い。

源氏物語に用ゐられてゐるいろごのみの例は左の三つである。

▽　かく世の譬ひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、いろごのみ、二心ある人にかゝづらひたる女、かやうなる事を言ひ集めたるにも……（若菜下）

▽　御齒の生ひ出づるに、食ひ當てむとて、笥をつと握り持ちて、雫もよゝと食ひ濡らし給へば、「いとねぢけたるいろごのみかな」とて……（横笛）

▽　出で給ふまゝに、下りて花の中に交り給へる御樣も、ことさらに艶だちいろめきてももてなし給はねど、怪しう、たゞ打見るになまめかしう恥かしげにて、いみじう氣色だついろごのみどもに准ふべくもあらず。（宿木）

この中、第一と第三とは、問題なく好色の意味である。若菜の例では、あだなる男・二心ある人とともに並べてゐるが、あだといふのは表面だけで内實の無いことを言ふ語だから、こゝはいづれも信賴できない男のことを言つてゐるのである。宿木の例は薫の姿を述べてゐる部分だが、その姿の美しさはなまなかの好色漢が樣子ぶつてゐるのとは較べものにならないといふのだ。源氏物語でも前のはう

の部分ならば、かういふ個所には「すきもの」といふ語を用ゐるのが普通である。宇治十帖になると、同じ源氏物語でも、いろごのみの考へにかなり大きな變化が見えてくる。薫の思想・行爲など、光源氏のそれと較べてみるならば、到底考へられないやうな點がある。第二の横笛の例だけは特異で、幼い薫が筍を食ひ濡らしてゐるのを光源氏が批評してゐることばである。まづ、このいろごのみは男女間のことに關係がなく、加へて、いろごのみが惡くない意味に用ゐられてゐる。光源氏のことばは「どうも變な風ないろごのみだね」といふのだから、いろごのみならいゝのだが、これはどうも變ないろごのみだ。趣味を持つのに事缺いてをかしなものに趣味があると笑つてゐるのである。いろごのみの用語例として、少くとも、好色といふ非難を含んだ意味に用ゐられてはゐない點、記憶すべき例である。

このほかにもうひとつ、

いといたういろこのめる若人にてありけるを……(末摘花)

といふのがあつて、これは大輔の命婦を言つてゐる。女のいろごのみの例である。いろごのみといふことは本來男性の側にあつたことであるが、それを女性の側にも延長して、男女間の趣味をはつきり味はふことのできる洗練せられた女を、いろごのみといふ語で評してゐる。これは特に伊勢物語に例が多いが、さういふ譯知りの女から、譯知りぶつて行動する女にまで多少輕めて使はれてきてゐる。

以上の例に就いても、いろごのみといふ語の意義内容が不安定であつて、時には古い意義をほの見せながら、次第に好色と同じ意義に落着かうとする傾向を見ることができると思ふ。いろごのみといふ語自體が動搖してゐる以上、源氏物語におけるいろごのみがいかなる概念を有するかは、やはり、光源氏を中心にいろごのみの男達の行動を通じて考察してゆくほかはない。光源氏がいろごのみの系譜の殆ど最後の人物であり、平安朝におけるその代表者であることは、今は疑はないでおく(「折口信夫全集第十四卷」に收められてゐる末摘花の卷の解題として書かれた文章が折口先生のいろごのみ論として、最も要を得てゐる)。時代が時代であるから、光源氏のいろごのみには大國主や雄略帝のそれに見られるやうな明るい朗らかさは見ることができない。しかし、いろごのみの概念を得るためには、これ以上具體化された豐富な資料を望むことはできなからう。源氏物語に就いて、いろごのみの内容を規定してゐる語彙を求

め、その用語例に依っていろごのみの概念を説明してみようといふのが本論の計畫である。

二

源氏物語において、いはゆる好色に當ることばはすきである。すきといふ名詞としても、すくといふ動詞としても、またすきずきし・すきがましといふ形容詞、すきたり・すきずきしかりといふ形容動詞としても用ゐられてゐる。そのほかに複合名詞または複合動詞となつてゐる語で、幾つかの注意すべきものがある。

すきといふ語の語感は、例へばすきずきしといふ語の用語例を並べてみるとはつきりする。すきずきしはいかにもすきな感じがするといふことであるが、「すきずきしき心のすさび」といふやうな例のほかに、會話においてしば〳〵用ゐられてゐる。

その初めの事、すきずきしくとも申し侍らむ。（帚木）

すきずきしさも人な咎めそ。（須磨）

いとすきずきしや。（明石）

すきずきしう、いとど憎まれむや。（關屋）

かうすきずきしきやうなる、後の聞えやあらむ。（繪合）

等々、まだ例は多いが、いづれも自分の行爲に對してすきな行爲であるという批判を恐れて、あらかじめそれに對する辯明をしてゐるのである。繪合の例は光源氏が自らの描いた須磨の繪日記を繪合はせの折に披露したことに對することばであるが、男女間のことに關係がなくても、佛や聖賢の教へに反してゐることへの自省を示す場合にこの語が常用されるやうになつたのである。すきといふことに引け目を感じてゐた當時の感情が見られると思ふ。

光源氏が末摘花の琴を聞きたく思つて、忍んで常陸の宮に出かける箇所がある（末摘花）。歸りがけに寢殿のあたりをうかゞふと、

透垣の蔭に立つてゐる男がゐる。實は頭中將であつたのだが、光源氏は誰とも見分かずに

誰ならむ。心懸けたるすきものあり。

と思つてゐる。頭中將は光源氏の跡をつけて來たのだから光源氏の想像は當らなかつたのだが、かうして女の家のあたりにうかゞひ寄るといつたやうな事をする男があつたことだけは訣る。かういふ男がすきものと呼ばれたのである。また女の場合にも、光源氏が祭の物見に出かけた折に車を立てる場所を讓らうといふ女がゐる。（葵）

いかなるすきものならむ。

と光源氏は思ふのだが、男にせよ、女にせよ、このやうに相手の注意を惹き、ゆかりを求め、交渉を生じて忍び會ふのがすきものなのである。さうした行動はすきありくといふことばで呼ばれるが、ありくといふ語は多く單獨でもすきありくの意味を含んでゐる。

なほかゝるありきは輕々しく、危かりけり。（空蟬）

光源氏が小君をしるべとして空蟬のもとに忍んだ時の反省である。

源氏物語の登場人物の中ではつきりすきものといふ語で呼ばれてゐる人々は、雨夜の階定（しな）めの際の左馬頭と藤式部丞、夕顔の卷では維光。若紫の卷で光源氏が

かゝればこのすきものどもは、かゝるありきをのみして、よくさるまじき人をも見附くるなりけり。

と考へてゐるのは維光や良淸等であらう。誰とはつきり指してゐない場合にも、やゝ階級の下る人々である。玉鬘の卷で、螢兵部卿をはじめ玉鬘の懸想人達を、光源氏が

すきものどもの心盡さするくさはひにて、いといたうもてなさむ。

すきものどもの、いとうるはしだちてのみこの邊りに見ゆるも……

と言つてゐるのは、やゝ間接的な言ひ方であるし、それに光源氏の位置からならば大抵の人を輕んじた言ひ方が許されるであらう。若菜の下で夕霧が柏木の樣子を見て

あるやうある事なるべし。すきものは定めて、我が氣色とりし事には忍ばぬにやありけむ。

と思つてゐる箇所があるが、夕霧なども柏木ほどの人に對して、こんなひとをきめつけたやうな言ひ方ができるのであらうか。やゝ不審が殘る。柏木の父頭中將の若い時分も

すきがましきあだびとなり。（帚木）

といふ批評を受けてゐるが、このはうはよほど婉曲である。とにかく、すきものなどといふ露骨な語を以て身分ある人を評することは許されなかつた。すきものと呼ばれるのは、光源氏のやうな大貴族から見れば一段も二段も低い階級の人々である。

ところが、光源氏自身の行動にもすきが混つてゐるのである。

かゝるすきごとどもを末の世にも聞き傳へて、輕びたる名をや流さむと……（帚木）

心幼くもてなし聞ゆななど宣はせつるもいと煩はしう、たゞなるよりは、かゝる御すきごとも思ひ出でられ侍りつる。（若紫）

こゝですきごとと言はれてゐるのは光源氏の行動なのである。光源氏自身でも

昔のすきごころのなごりあり顏に宣ひなすも本意なくなむ。（澪標）

あぢきなきすきごころに任せて、さるまじき名をも流し……（澪標）

と、若い時分のすきごころを認めてゐる。いろごのみの代表者である光源氏の行動にすきといふべき箇條が幾つか混つてゐることは注意しておかねばならない。空蟬や夕顏の事件、若紫を見出すくだり、末摘花や朧月夜の尙侍との交渉、數へ上げればいづれもすきと言はねばならない行爲なのである。

すきに對立する語はまめで、まじめといふことである。まめなり・まめやかなり・ものまめやかなり・まめまめし・まめだつ・まめざま・まめごと・まめびと・まめごころといつた用語例を持つてゐる。

かの大納言の御女物し給ふと聞き給へしは。すきずきしき方にはあらで、まめやかに聞ゆるなり。（若紫）

といふ例がすきとまめとの對照をよく表はしてゐる。大納言の女のことを尋ねるので、好色な氣持ちから尋ねてゐるかと思はれよう

が、さうではない。色氣など離れた實直な心で尋ねてゐるのだといふのである。こゝの光源氏は、かうは言つてゐるものの、實はすきごころを多分に持つてゐるのだが、眞實きまじめな、物堅い性格の人がまめびとと呼ばれる。源氏物語にはまめびとの評判をとつた二人の大將が登場する。

大將は名に立てるまめびとの、年頃いささか亂れたる振舞ひ無くて過し給へる名殘りなく……(眞木柱)

まめびとの名を取りて賢しがり給ふ大將……(夕霧)

眞木柱の例の大將は髯黑の大將で、源氏物語の貴公子達の中で最も無骨な感じを與へる人物であるが、それが玉鬘を得てすつかり樣子が變つて來たのを、いさゝか冷笑してゐるのである。後の夕霧の大將を言つた例のはうはもつと底意地の惡い言ひ方である。まめといふことは、なるほど聖賢の敎へにかなつたりつぱなことに違ひない。だが、まめであり過ぎて人間的な親しみが感じられないといふ、誰しもが感じてゐる反感を作者が代表して皮肉つたわけである。

光源氏の若い時分についても、作者は

さるは、いといたく世を憚り、まめだち給ひける程に、なよびかにをかしきことは無くて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし。(帚木)

と言つてゐる。交野の少將はいろごのみの模範とされた昔物語の主人公で、野分の卷には、交野の少將が文を付ける花を紙の色によつて選んだことを言つてゐる。光源氏がまじめに身をとりなしてゐるのが無趣味で、いろごのみの理想に及ばないと、やはらかく批判してゐるのだ。若い時分の光源氏には確かにさういふ一面があつたらしい。光源氏の噂をしてゐる空蟬附きの女房達も

いといたうまめだちて、まだきにやんごとなきよすが定まり給へるこそ、さうざうしかめれ。(帚木)

と言つてゐる。その半面、光源氏はあちこちと忍び歩いてゐるのであるが、さういふ噂を知らない桐壺の帝は、ひそかに光源氏がまめ過ぎはしないかと心配してゐる。末摘花には、大輔の命婦がそれを知つてゐて、

上の、(光源氏が)まめにおはしますと持て惱み聞えさせ給ふこそをかしう思う給へらるゝ折々侍れ。かやうの御寳れ姿をいかで

かは御覽じつけむ。

とひやかしてゐるところがある。

このやうに、まめに身をとりなすことが必ずしも讃められてゐないし、また、すきな行動が必ずしも非難せられてはゐない。

御齡の程、人の靡きめで聞えたる樣など思ふには、すき給はざらむも情なく、さうざうしかるべしかし。（夕顏）

すきごころなしと常に持て惱むめるを、さは言へど過さざりけるは。（紅葉賀）

夕顏の卷のは維光が思つてゐることであるが、後の紅葉賀のはうの例は桐壺の帝のことばである。源典侍と戯れてゐる光源氏を見て、常々から光源氏のすきごころの無いことを心配してゐたが、それでも程度を越してはゐなかつたと安心してゐるのである。桐壺の帝は光源氏に正面からいろごのみの道を說くことのできる唯一の方で、光源氏に教訓を與へる場面も出てくる。その帝が光源氏の爲にすきの要素がないことを憂へてゐたのである。これによつても、すきといふ要素がいろごのみに缺けてはならないことが訣る。徒然草などもいろごのみをすきと同じやうな意味に使つてゐるが、

いろこのまざらむ男は、いとさうざうしく、玉の盃の底無き心地ぞすべき。

と言つてゐるのは、やはり、男の理想的な性格にすきの要素があることを望んでゐるのである。

三

桐壺の帝の光源氏への庭訓には

心のすさびに任せて、かくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり。（葵）

といふことばがある。光源氏が六條の御息所との間に交渉を生じておきながら、とかく冷淡な樣子が見えるので、それでは女の立ち場が苦しく、よくない世評が立つことであらうと戒めてゐるのである。さういふ心の赴くまゝに任せた行爲が本當のすきごとで、極端に

言へば性的な興味だけに終始して相手への思ひ遣りが無いことを言ふのである。六條の御息所は前皇太子妃といふ社會的な地位から言つても當然光源氏の北の方となることのできる人であり、御息所自身もさういふ期待を懷いてゐた。それなのに、光源氏の扱ひはいつまでも忍び所としてのそれであり、葵の上歿後にも北の方としようとする意志が見えないので、遂に意を決して伊勢へ下つてしまふ。御息所の生靈が葵の上に憑いたことを光源氏が心愛く思つてをり、御息所自らも思ひ當るふしがあるのだが、それでも世間の思はくを考へると、そのまゝの形で交渉を續けることはいかにも中途半端であり、立ち場を失ふことになるので、世を怨むやうにして伊勢へ下るのである。それに對して、光源氏は悲しみこそすれ、強ひて引き留めようとまではしない。光源氏が交渉を持つた多くの女達の中で、この御息所だけが滿足を與へることのできなかつた人である。後年、光源氏が

この世の榮之末の世に過ぎて、身に心もとなき事は無きを、女の筋にてなむ人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬ事もある。（若菜上）

と言つてゐるのは、六條の御息所のことだと思はれる。これは左中辨が光源氏の内々の述懷を漏らし傳へたもので、この直後に、左中辨の解釋として、光源氏の見集めた女性達の中に光源氏に相應するだけの重々しい身分の女性がゐないことを言つてゐるやうにとりなしてゐるが、それは書き進む間に作者の筆が動いてゐるのだ。相手の女性のもどき（抵抗・非難）を受け、自分の心としても滿足しなかつたといふ女性は、まづ六條の御息所を措いてはない。薄雲の卷でも、光源氏が秋好の中宮に

なほ、心から、すきずきしき事に附けて、物思ひの絕えずも侍りけるかな。さるまじき事どもの心苦しきがあまた侍りし中に、遂に心も遂げず結ぼほれて止みぬる事二つなむ侍る。

と語つて、その一つが六條の御息所のことだと言つてゐる。光源氏が秋好の中宮の後見に心を盡すのも、御息所のこの世に殘る執念をはらさう爲なのである。それでも、御息所の怨靈は後に紫の上に憑いて死ぬ程の大病を煩はせ、更に女三の宮出家の因をも作つてゐる。この爲光源氏のいろごのみの生活には大きなきずがつく。いろごのみの理想が女の恨みを受けないことであつた背後に、平安朝では怨靈の考へがあつたと見ねばなるまい。怨靈に附き纏はられては、もちろん、いろごのみの生活が圓滿に遂げられる筈がない。

桐壺の帝の庭訓には、なほ

人の爲はぢがましきこと無く、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ。（葵）

とも言はれてゐるし、光源氏自身もしば〳〵「人の心破らじ」といふことを言つてゐる。いろごのみの男は、多くの女達の心を破らず、いづれをもなだらかにもてなすことが必要である。桐壺の帝はいろごのみの生活を遂げた方であるが――と言ふより、代々の帝は歴史的な性格としてはすべていろごのみなのである――たゞ桐壺の更衣に關してだけは、いろごのみに破綻を生じてゐる。それは帝の寵愛が偏つて他の女性達の恨みを負つたからである。帝自らも

世にいさゝかも人の心を曲げたる事はあらじと思ふを、唯この人故にて、あまたさるまじき人の恨みを負ひし果て果ては……（桐壺）

といふ述懐をもらしてゐるが、この事に關しては「樣惡しき御もてなし」とか「そこらの人の譏り恨みをも憚らせ給はず、この御事に觸れたる事をば道理をも失はせ給ひ」などといふ容赦のない批評が加へられてゐる。

ところが、同じやうな寵愛も藤壺の女御の場合には

これ（藤壺）は人の御際勝りて、思ひなしめでたく、人もえ貶しめ聞え給はねばうけばりて飽かぬ事なし。かれ（桐壺）は人も許し聞えざりしに、御志のあやにくなりしぞかし。（桐壺）

とあつて、身分の高い女性を大事に扱ふことは非難されてゐないのである。つまりは、女の身の程にふさはしい待遇が必要なのであつて、その程を越えると非難が生ずるのだ。

光源氏も或特定の女性だけに心を傾けることをしてゐない。それは多くの女性に少しづつ心を分けるといふやうなことではなく、それ〴〵に對して深い誠意を見せながら、なほかつ、相應の度を過ぎないのである。古代的に言へば、それだけ大きな優れた魂を持つてゐることで、誰にでも許されるといふ資格ではない。光源氏が

わが心ながら、いとかく人に染む事は無きを……（夕顔）

と言つてゐる夕顔の女の事件だけは特例であり、光源氏にとつてはよほど異常な經驗であつたのだ。

このやうにいろごのみの調和を破ることがみだるといふ語で言はれてゐる。「忍ぶの亂れ」はその文學的な表現である。

いろごのみの男が單なるすきものと違ふのは右のやうな點である。すきものが末梢に走つてそれを裏附けるものに缺けてゐるのに對して、いろごのみの男はすきをも包含して調和を保つてゐる。決して好色一途ではないのである。

さしもあだめき、目馴れたる、うちつけのすきずきしさなどは、このましからぬ御本性にて……(帚木)

といふことばが光源氏のいろごのみがいかなるものであるかを語つてゐる。

源氏物語では、いろごのみの男のさういふ特長をこころながしといふ語で言つてゐる。

わがさりとも心長う見果ててむと思しなす御心を知らねば、彼處にはいみじうぞ歎い給ひける。(末摘花)

末摘花のやうに逢つてみてすつかり失望した女性に對しても、光源氏は心長く末を遂げようと思つてゐるのである。

こころながしといふ語は、從つて、女性の心をとる場合に始終使はれる。

すきずきしき方に疑ひ寄せ給ふにこそあらめ。さりとも、短き心はえ遣はぬものを。(末摘花)

など、その典型である。自分がすきごころから言ひ寄つてゐるのではない。心長さを見てくれといふのが、かういふ場合の常套なのである。

しかし、光源氏の心長さは口先ばかりではない。それを行爲の上に實證してゐる。

さしも深き御志無かりけるをだに貶しあぶさず、取りしたゝめ給ふ御心長さなりければ……(玉鬘)

院は怪しきまで御心長く、假にても見初め給へる人は、御心とゞめたるをも、またさしも深からざりけるをも、方々に付けて尋ね取り給ひつゝ……(若菜上)

玉鬘の卷のは右近が思つてゐるので、夕顔の君がながらへてゐたならば、この六條院に集ひ住んでゐる人々の數の中に入つたに違ひないと考へてゐるのである。若菜のはうは左中辨が言つてゐることで、そのことば通り、光源氏は僅かな交渉しか持たなかつた人々まで

も六條院に集めて、それ〴〵の人生を見屆けるといふいろごのみの頂點に立つ生活をしてゐる。

心長さを持たない單なるすきは、あだといふ語で形容される。あだなり・あだあだし・あだめく・うちあだく・あだごと・あだびと・あだな・あだけ・あだけごとと變化の多い語であるが、すきと同樣、この語もまめと對立して用ゐられる。

あだごとにも、まめごとにも……（帚木）

といふやうな例でそれが訣る。だから、あだを以て許せられてゐることは、表面美しくて內實のそれに伴はないといふ不信の表明なのである。

これをあだあだしき振舞ひと言はば、女の有樣苦しからむ。（末摘花）

おれのこの行動を世間並みの浮氣な振舞ひだと言つては、女の立ち場がなくなつてしまふだらうと言つて、冗談ながらも常陸の宮の姫君といふ地位への顧慮を見せてゐる。光源氏の末摘花に對する處遇には、いつもこの思ひ遣りが含まれてゐる。

あだなことを言ふのに、源氏物語中、たゞ一箇所しか出てゐないが、大變印象的な語がある。はなごころといふ聞えは美しいがうつろひやすさを暗に非難してゐる語である。

はなごころにおはする宮なれば、あはれとは思すとも、いまめかしき方に必ず御心移ろひなむかし。（宿木）

古今の序に「人の心はなになりにけるより」とあるのと同じことだが、櫻の花をあだなものと見る習慣があるのだから（古今集・春・六二）、はなごころはあだごころと言つても同じことである。こゝの宮は匂宮であるが、この語から見ても匂宮がいろごのみではないことが訣る。いろごのみの男ならば、あだな性質だといふやうな批評を受ける筈がない。

四

いろごのみの男は才能が優れてゐることもその條件である。光源氏の才（ざえ）は花宴の青海波の舞ひや須磨明石の繪日記をはじめ、隨所に

人々を驚かすことが出てくるが、才には二種あつて、學問を意味する才學のほうはひと通り以上心に入れて學ぶことを戒められてゐる（繪合）。光源氏が特に優れてゐるのは書・畫・音樂・舞踊といつた本才と呼ばれる方面である。才學のほうは、謂はばまめに當るもので、あまりこれに偏することはいろごのみの調和を破るおそれがある。博士などの頑なしさが女房達に嘲笑せられるのもこゝに理由がある。書・畫・音樂・舞踊等に優れてゐることを形容する最も普通の語がをかしであつて、いろごのみの男の行動を一語で評するとすれば、この語を以てするほかない（ほかにめでたしがあるが、これはたゞ一般に、結構だといふ讃めことばに過ぎない）。

をかしは、これまた、まめに對立して用ゐられる。

なにやかやと、はかなき事なれど、をかしき樣にも、まめやかにも宣へど……（末摘花）

かういふ場合はいくらか表面的な美しさををかしと言つてゐるのだが、あだとは違つて、非難する氣持ちは無い。人の心を惹くやうな派手な美しさを一般に言ふ語である。

いろごのみの要素としてすきが必要であるやうに、いろごのみの男の行動にはをかしと評せられるやうな面が必要である。交野の少將のやうに「なよびかにをかしき」ところがあつてこそ、いろごのみと言へるのである。光源氏の姿の描寫など、そのをかしさをいろいろに言つてゐるので、結局は女性的な美しさを言ふことになるのである。

そのやうなをかしさは人生を最も美しく處理して行く智慧であり、女性の心を表面的に惹くばかりでない。女性に對して理想的な應接ができ、女性をして信頼させるに足る能力に通じてゐるのだ。謂はば優れた魂の發動が一方においては本才として現れ、一方においてはいろごのみの行動となつて現れるのである。交野の少將が花を紙の色に整へたといふことも、四季をり〳〵の情趣を知り、それに應じての美的な生活を遂行する能力があるのがいろごのみであることを意味してゐる。この方面は後に和歌の上でやかましく言はれる有心無心の「心あり」といふことに通じてくるものだ。

かう考へてくると、先の横笛の卷の「ねぢけたるいろごのみかな」といふ例も解けてくる。自然物の上にもそれ〴〵の持つ情趣を發見して、それに心をとめるのがいろごのみであり、薫が筍なんかに心を留めたことを、光源氏がこれは大變ないろごのみだと笑つたの

である。

昨日今日と思す程に、三十年の彼方にもなりにける世かな。かゝるを見つゝ、かりそめの宿りをえ思ひ棄てず、木草の色にも心を移すよ。（槿）

木草の色にも心を移すのがいろごのみの男の心の持ち方なのであるが、それが佛の敎へに違ふことを光源氏自身が反省してゐるのである。

女性に對しても、それ〴〵の身分・家柄・財產・容貌・才能、それに應じて心を留め、執着を感じるのがいろごのみであつた。さういふ執着を感じないのは、むしろまめに過ぎていろごのみの理想に反することである。しかも、執着こそは佛の最も戒めるところであつた源氏物語には隨所にかういふ矛盾と煩悶とが記されてゐる。

いろごのみといふ語が好色の意味に引き寄せられたのに反して、その後をおそつて用語例を擴張してきたのはすきである。源氏物語におけるこのむといふ語はこのまし・このみごころぐらゐしか用語例の變化を見せてゐないが、

何の才も、心より放ちて習ふべき業ならねど……家の子の中には、なほ人に拔けぬる人の、何事をもこのみ得けるとぞ見えたる。（繪合）

手をいま少し故づけたらばと、（螢兵部卿の）宮はこのましき御心に、いさゝか飽かぬ事と見給ひけむかし。（螢）

といふやうな例はいろごのみと共通するこのむの意義を見せてゐる。一つの道に對して趣味を持つて或境地に達するとか、女性の才能・用意などを見集めるといふ意味である。ところが、すきがこれに近く用ゐられてゐることがある。源氏物語も後半になると、すきの用法など大分違つて來てゐるのではないかと思はれる。

今宵の御すきには、（夜が更けたことを）人許し聞えつべくなむありける。（橫笛）

落葉の宮の母御息所のことばである。夕霧の大將に對して面と向つて言つてゐるのだから、非難の語でないことは確かである。風流な御振舞ひといふくらゐに譯さねばなるまい。光源氏が螢兵部卿の宮の心を惑はさうといふ箇所の

いとよくすき給ひぬべき心惑はさむと……（螢）

などといふ例も悪意のない使ひ方で、先の「このましき御心」と同じことである。

むくつけき心の中に、いさゝかすきたる心のまじりて、かたちある女を集めて見むと思ひける。（玉鬘）

これは肥後の監のことであるが、讃めてゐるに近い用法である。先の夕霧が柏木をすきものと言つた例なども、さほど悪い意味は持つてゐないのかも知れない。伊勢物語にも「すける物思ひ」（四十段）などといふ例があつて、すきといふ語がいろごのみの領分にまで擴張されて來てゐるのである。